



# 日本語尾音索引—古語篇—

丹羽一彌 共編  
田島毓堂

笠間索引叢刊 73



# 目 次

例言 .....	(i)		
あ .....	1	は .....	162
い .....	1	ひ .....	166
う .....	10	ふ .....	175
え .....	28	へ .....	185
お .....	30	ほ .....	188
か .....	31	ま .....	190
き .....	35	み .....	195
く .....	47	む .....	202
け .....	63	め .....	207
こ .....	68	も .....	211
さ .....	74	や .....	214
し .....	78	ゆ .....	219
す .....	98	よ .....	221
せ .....	109		
そ .....	111	ら .....	224
		り .....	230
た .....	113	る .....	243
ち .....	118	れ .....	257
つ .....	125	ろ .....	260
て .....	133		
と .....	137	わ .....	264
		ゐ .....	265
な .....	146	ゑ .....	266
に .....	149	を .....	267
ぬ .....	152		
ね .....	153	ん .....	269
の .....	156		
あとがき——付「諺」尾音索引 .....			287



## 例 言

本書は笠間索引叢刊 65「日本語尾音索引 — 現代語篇 —」の姉妹篇として作成したもので、古語のいはゆる逆綴五十音索引である。底本として金田一春彦氏他編「新明解古語辞典」(三省堂刊, 第16刷)を使用し、以下の原則によつて収録項目の選択, 表記, 配列を行なつた。

- 1 底本における親項目と子項目は区別せず、その全部を収録した。ただし、現代かなづかひから検索できるやうに掲げてある

がつ【月】 ♪ ぐわつ

のやうに、破線で囲んであるものは全て除いた

- 2 本書は語彙索引といふ性格が強いので、底本で諺とされてゐる項目は除外した。その場合、格言・箴言・故事成句・慣用句などのどこまでを諺とするのか、その認定は全て底本に従つた。従つて

唐(たう)へ投げ金 諺

唐(から)へ投げ金

の2例を見ると、底本では前者のみ諺としてゐるので、本書では前者を除外し、後者は収録するといふことになつた。かうして除外した諺は「あとがき」の中に「新明解古語辞典収載諺一覧」として掲示した(本篇302~307頁)。

- 3 ある形式が、一方では親項目として、他方では別の項目の下で子項目として、二重に出てゐる場合がある。その中には「物思ふ」や「我が身」のやうに、説明や用例に異同の見られる例もあるが、「ひならぶ【日並ぶ】」と「【日】」の子項目「日並ぶ」のやうに、説明も用例も同じといふものもある。底本に忠実であるといふ原則から、今回はこれらも両方を並べて掲げた。
- 4 見出しのひらがなとカタカナの表記は底本に従つた。これらは歴史的かなづかひになつてゐるが、底本と同様に拗音・促音のかなは小字下寄せで示し、外来語の長音は「ー」で示した。なほ複合語を示す・、活用語尾を示す・は省略した。
- 5 見出しがなの省略部分——、及び漢字表記の省略部分——は、それぞれ該当するかなで表記した。

底本：うちは【内端】……—もの【内端者】

あまつつみ【雨——】

本書：うちはもの 内端者

## あまつつみ 雨つつみ

- 6 はじめから漢字かなまじり表記となつてゐる連語は、ひらがなにして掲げた。
- 7 項目の配列は一般の辞典と逆にしてある。即ち、まづ語末の文字を五十音順に、語末が同じならば2番目を、そこまでが同じならば3番目といふやうに、さかのぼつて五十音順に配列してある。
- 8 清音・濁音・半濁音、拗音がな、促音がな等の順については底本に従つた。ただし外来語の「ー」はンの後に並べた。
- 9 その他配列については原則として底本の方式に従つた。
- 10 各項目の右列には底本の【 】内の漢字かなまじり表記を掲げた。底本で2種類以上の漢字があてられてゐる場合は、原則として最初のもののみを採用した。漢字のあてられてゐないものは、( )内に品詞・枕詞などの文法用語その他を底本に従つて入れた。文法用語の略し方は底本に従つた。直接漢字かなまじり表記となつてゐる連語にはその表記をあてた。
- 11 底本で1項目が白ぬき漢数字によつてさらに分けられてゐる場合、本書では次の原則によつた。

- (1) 【 】の後で分けられてゐる場合、全体で1項目として、右列には【 】内の漢字を掲げた。

底本：けっく【結句】■(名)■(副)

本書：けっく 結句

- (2) 分けられたうちどれにも漢字があてられてゐない場合、全体を1項目として、右列には■の( )の文法用語のみ掲げた。

底本：あはれ■(感)■(名)■(形動ナリ)

本書：あはれ (感)

- (3) 分けられたそれぞれに【 】がある場合、■以下で■とは異なつた漢字があてられてゐるならば、本書では別の1項目とし、右列にその漢字を掲げた。■と同じ漢字があてられたり、漢字が全くあてられてゐないものは独立の項目としなかつた。

底本：うつす■【写す】■【移す】■【遷す】

本書：うつす 写す

うつす 移す

うつす 遷す

底本：あづま■【吾妻】■【東】■【東・吾妻】

本書：あづま 吾妻

あづま 東

底本：おとど■【大殿】■【大臣】■……

本書：おとど 大殿

おとど 大臣

- (4) ■には漢字があてられてゐないが、■以下に新しく漢字があてられてゐる場合には、■とそれとを別の項目とした。

底本：かつて（副）■……■【曾て・嘗て】

本書：かつて（副）

かつて 曾て

- (5) ■■の下位分類である①②等に新しく漢字があてられてゐる場合があるが、本書では独立の項目としてゐない。

底本：なか【中】①②【仲】③④

本書：なか 中

- (6) なお、この他に

なにさま【何様】■【何方】■……

など、いくつかの例外的なものがあるが、それについては「あとがき」を参照されたい。

- (7) 漢字表記とは別に、枕詞専用のもの、または■に枕詞となつてゐるものは、右列に（枕）と示した。

- 12 底本において送りがな・読みがなや漢字表記が不統一になつてゐる場合があるが、それも忠実に底本に従つた。例えば

ごにんばり 五人張

よにんばり 四人張り

さんにんばり 三人張り

いやちへしきに 弥千重頻に

ちへなみしきに 千重波頻きに

うめのきぶげん 梅の木分限

くすのきぶんげん 楠分限

かくゆゑ 斯くゆゑ

そこゆゑ 其処故

底本の構成その他について、統一的に処理できぬ点がいくつかあつた。それらについて本書の編者としても検討を重ねたが、結局今回はできるだけ底本に忠実であることにした。以上述べてきた項目の選択・表記・漢字の問題を含めて、検討の対象となつた事例のいくつかは「あとがき」に述べてある。御覧の上、御教示願ひたい。

以上

## ●編者紹介

丹羽一彌 (にわ かずや)

昭和43年3月 名古屋大学大学院修士課程修了  
現在 東海学園女子短期大学助教授  
専攻 言語学  
著書・論文 『ことばへの接近』『フランス語の文構造と副詞』(『ロマンス語研究』6, 1972)『トル・ヨル考』(『東海学園国語国文』11, 1977)『日本語尾音索引—現代語篇—』其他

田島毓堂 (たじま いくどう)

昭和43年3月 名古屋大学大学院博士課程単位取得  
昭和48年3月 文学博士(名古屋大学)  
現在 名古屋大学助教授  
専攻 国語学  
著書・論文 『道元禅師全集』(上・下)索引『後撰和歌集研究史』『源氏物語絵巻詞書総索引』『蒙古襲来絵詞詞書本文並びに総索引』『正法眼蔵の国語学的研究』(研究篇)『同』(資料篇)『日本語尾音索引—現代語篇—』『法華経為字訓一付。為字索引』(名古屋大学文学部三十周年記念論文集) 其他



にほんごびわんさくいん  
日本語尾音索引—古語篇— ● 笠間索引叢刊 73

昭和54年8月30日 初版発行 ￥6,000

共編 丹羽一彌<sup>◎</sup>  
田島毓堂

発行者 池田猛雄

発行所 有限会社 笠間書院  
〒101 東京都千代田区神田神保町1-46  
電話 03-295-1331(代) 振替東京1-56002

3381-852073-0924

三美印刷・手塚製本所